

教育講演3（物理療法）

2026年11月15日（日） 9:00～10:30 | 第1会場（天瑞：4F）

教育講演3（物理療法）

座長：中原 寿志（宮永病院）



〔講師紹介〕

中村 潤二（ナカムラ ジュンジ）

西大和リハビリテーション病院

〔職歴〕

- 2007年 西大和リハビリテーション病院 リハビリテーション部 入職
- 2021年 畿央大学大学院健康科学研究科 客員准教授
- 2023年 西大和リハビリテーション病院 リハビリテーション部 副技師長（現職）

〔学歴〕

- 2007年 畿央大学理学療法学科 卒業
- 2011年 畿央大学大学院 健康科学研究科修士課程 修了
- 2015年 畿央大学大学院 健康科学研究科博士課程 修了

〔主な資格〕

理学療法士，専門理学療法士（物理療法，神経），認定理学療法士（物理療法）

〔業績〕

- ・中村 潤二, 新山 実優, 他: 拡散型圧力波療法の刺激強度の違いが健常者の下肢の柔軟性や脊髄運動ニューロン興奮性に即時的に与える影響. 物理療法科学 2024. (学術優秀賞)
- ・Nakamura J, Nishimae T, et al. Effects of postural-control training with different sensory reweightings in a patient with body lateropulsion: a single-subject design study. Physiother Theory Pract. 2023.
- ・Nakamura J, Okada Y, et al. Reliability and laterality of the soleus H-reflex following galvanic vestibular stimulation in healthy individuals. Neuroscience letters 2021.
- ・Nakamura J, Shiozaki T, et al. Role of somatosensory and/or vestibular sensory information in subjective postural vertical in healthy adults. Neuroscience letters 2020.
- ・Nakamura J, Kita Y, et al. Influence of the stimulus parameters of galvanic vestibular stimulation on unilateral spatial neglect. Neuroreport 2015 May 27;26(8):462-6.
- ・Nakamura J, Kita Y, et al. Effects of galvanic vestibular stimulation combined with physical therapy on pusher behavior in stroke patients: a case series. NeuroRehabilitation 2014;35(1):31-7.

〔主な社会活動〕

- 日本物理療法学会 代議員
- 日本理学療法学会連合 日本物理療法研究会 理事
- 日本理学療法学会連合 理学療法学 査読委員
- 日本物理療法学会 物理療法科学 編集委員
- 日本神経理学療法学会 神経理学療法 査読委員

教育講演3（物理療法）

2026年11月15日（日）9:00～10:30 | 第1会場（天瑞：4F）

教育講演3（物理療法）

座長：中原 寿志（宮永病院）

“いま”を問い直し，“未来”を変える物理療法 ～作用機序と病態に基づく使い分けと臨床判断へ～

中村 潤二（西大和リハビリテーション病院）

物理療法は、疼痛や関節拘縮、痙縮、筋力低下、運動麻痺、歩行障害など、さまざまな症状に対して用いられている。しかし物理療法のモダリティの選択や刺激条件は経験的に決められ、画一的な介入選択となりやすく、どの病態に、なぜその介入を用いるのかが十分に整理されていないことも多い。物理療法をより有効に活用するためには、モダリティごとの作用機序や特性を理解したうえで、対象者の病態と結びつけて適応を考える必要がある。

本講演では、電気刺激療法や体外衝撃波療法を中心に、現在行われている物理療法を見直したい。電気刺激療法については、脳卒中後の痙縮や運動麻痺、しびれ、歩行障害に対する適応を中心に上げる。電気刺激といっても刺激方法は異なり、目的や刺激対象も異なる。単に電気を流す治療として一括りにするのではなく、何を目的とした刺激なのかを整理しながら適応を考える。

体外衝撃波療法は、比較的新しい物理療法モダリティであり、脳卒中後の痙縮などを中心に紹介する。痙縮は伸張反射に関与する神経学的要因だけで説明できるものではなく、筋や腱など末梢組織の変化も関与し、多様な病態を示す。体外衝撃波を用いる際には、症状名だけで適応を決めるのではなく、どの組織や病態を標的とするのかを検討したうえで選択することが重要である。

最後に物理療法の未来への可能性として、ニューロモデュレーションについて取り上げる。なかでも迷走神経電気刺激に着目する。迷走神経は自律神経反応の調節に関与し、循環動態や睡眠、さらに運動学習にも影響を及ぼす可能性がある。国際的には迷走神経刺激に関する報告が増加している一方で、本邦のリハビリテーション医療の領域においては、研究報告や臨床活用が十分ではない。本講演では、パーキンソン病に対する迷走神経電気刺激について自験例を交えて紹介し、今後の物理療法における可能性を考える。

物理療法の“いま”を問い直すとは、これまで用いてきた治療を否定することではなく、その作用機序と病態との関係をあらためて見つめ直すことである。画一的に治療を選択するのではなく、評価によって治療標的を定め、患者ごとに適切な刺激を選択することが求められる。その積み重ねが、既存の物理療法の価値を引き出すとともに、ニューロモデュレーションをはじめとする新たな治療の可能性を臨床へつなげていく。本講演を、日常の物理療法を問い直し、その先にある理学療法の“未来”を考える機会としたい。